

Table4 「親の経験」項目とバリマックス回転後の因子負荷量行列（信頼性 α ）

	I	II	III	IV
	(.874)	(.867)	(.750)	(.643)
提供会員のおかげで、子どもの身体面が安定した(病気や怪我が減った)。	.700	.259	.178	.133
提供会員のおかげで、子どもに、挨拶などの礼儀作法が身についた。	.654	.297	.334	-.006
提供会員のおかげで、子どもの精神面が安定した。	.643	.270	.378	-.003
提供会員のおかげで、子どもに、早寝早起きなどの生活習慣が身についた。	.632	.182	.103	.058
提供会員から、食い初め等年中行事や、伝統文化の大切さを教えてもらった。	.628	.324	.117	.120
提供会員のおかげで、子どもにコミュニケーション能力が身についた。	.578	.200	.440	.000
提供会員のおかげで、子どもの病気への対処に関して不安が減った。	.551	.351	.283	.092
提供会員に、親としてだけでなく、社会の一員として認めてもらった。	.507	.394	.290	-.010
提供会員から、物事の見方・考え方を教えてもらった。	.374	.758	.246	.049
提供会員に、育児の悩みを聞いてもらった。	.315	.725	.294	.053
提供会員に、育児の方法を習った。	.321	.626	.187	.033
提供会員から、親としての姿を学んだ。	.480	.495	.343	-.075
提供会員から、効率的な家事や節約の方法について習った。	.411	.478	.050	.195
提供会員や本事業は、いざと言うとき助けてくれる存在になった。	.120	.118	.722	-.099
提供会員のおかげで、家族以外の人と関わる機会ができた。	.324	.234	.579	-.025
提供会員を、地域のボランティア(有償・無償)として尊敬している。	.140	.101	.549	-.224
提供会員に連絡すればよいと思うと、孤立感を感じなくなった。	.298	.351	.491	.031
提供会員に、無理なお願いを引き受けてもらった。	.356	.210	.412	.041
提供会員に、プライベートなことを聞かれ嫌な思いをした。	.078	-.029	-.050	.699
提供会員から、子育ては母親がすべきものと言われた。	.116	.106	-.066	.645
提供会員に、子どもを預けることが不安になった。	-.015	.033	-.055	.515
積寄与率(%)	19.7	33.6	45.7	52.0

Table5 「親の経験」次元得点平均（標準偏差）

	利用者	P
第1因子：子どもとの関わり方を学ぶ経験	2.28 (0.75)	***
第2因子：家事や育児の方法を学ぶ経験	2.24 (0.81)	***
第3因子：地域とのつながりを学ぶ経験	3.18 (0.63)	***
第4因子：地域の煩わしさを知る経験	1.20 (0.40)	***

注. ***<.001

Table6 「親の経験」と属性の相関

	就労	頻度	会員	地域別
経験I	-.143***	.417***	.018	.015
経験II	-.032	.256***	-.009	-.022
経験III	-.101**	.273***	.017	.018
経験IV	-.038	.045	-.087**	.045

注. **P<.01 ***P<.001

Table7 「親の経験」と利用頻度の相関

	月1回未満	月20回以上	P
経験I	1.64 (0.62)	2.69(0.66)	***
経験II	1.68(0.68)	2.44(0.73)	***
経験III	2.61(0.83)	3.41(0.45)	***
経験IV	1.19(0.43)	1.22(0.39)	

注. **P<.01 ***P<.001

Table8 「親の発達」次元得点平均（「以前そうだった」を含む）

	除外前	P
第1因子：柔軟性	3.27 (0.73)	***
第2因子：自己抑制	3.55(0.64)	***
第3因子：運命・信仰・伝統の受容	3.67(0.54)	***
第4因子：視野の広がり	3.14(0.69)	***
第5因子：生き甲斐・存在感	3.25(0.59)	***
第6因子：自己の強さ	2.86(0.70)	***

注. ***p<.001

Table9 「親の発達」次元得点平均（「以前そうだった」を含まない）

	除外後	P
第1因子：柔軟性	3.01(0.59)	***
第2因子：自己抑制	3.11(0.52)	***
第3因子：運命・信仰・伝統の受容	2.75(0.58)	***
第4因子：視野の広がり	3.31(0.48)	***
第5因子：生き甲斐・存在感	3.00(0.49)	***
第6因子：自己の強さ	2.60(0.57)	***

注. ***p<.001

Table10 「親の発達」と属性の相関

	就労	頻度	会員	地域別
発達I	-.082	.074	-.087*	.068
発達II	.065	-.002	-.068	.013
発達III	.014	.037	-.016	.140**
発達IV	.080	.036	-.133*	.077
発達V	-.063	.063	-.030	.068
発達VI	-.039	.029	-.056	.100*

注.*P<.05 **P<.01

Table11-1 「親の経験」と「親の発達」の相関

	発達I	発達II	発達III	発達IV	発達V	発達VI
経験I	.225***	.214***	.230***	.160	.271***	.222***
経験II	.145**	.171**	.242***	.202***	.174**	.103*
経験III	.194***	.150**	.178***	.263***	.207***	.116*
経験IV	.039	.025	.081	.023	.072	.069

注.*P<.05 **P<.01 ***P<.001

Table11-2 「親の経験」と「親の発達」の相関 (**P<.001のみ)

発達 経験	柔軟性	自己抑制	運命・信仰・ 伝統の受容	視野の 広がり	生き甲斐 ・存在感	自己の 強さ
子どもとの関わり方	○	○	○		◎	○
家事や育児の方法			○	○		
地域とのつながり	△		△	◎	○	
地域づきあいの煩わしさ						

◎値が.025以上 ○値が.02以上 △数値が.015以上

一方、地域づきあいの煩わしさを知る経験については、発達の6因子すべてと相関は見られなかった。このことについて考えてみると、「プライベートなことを聞かれいやな思いをした」「子育ては母親がすべきものと言われた」「子どもを預けることが不安になった」という経験が、柔軟性や自己抑制、運命・信仰・伝統の受容、視野の広がり、生きがい・存在感、自己の強さなどを育てるとは、必ずしも言えないことがわかる。

しかし、次のような発達のケースをどのように捉えたらよいだろうか。以下は、Cさんの事例である。Cさんは、子育てをしていて、精神的に限界の状態だからこそ、本事業を利用したという。当初は、本事業を利用することによって、自分が支援する側になるまで意識を変えようとは思ってみなかったという。Cさんは、本事業利用当初、支援者との関係に煩わしさを感じていたものの、アドバイザーの支援によって、自分自身が振り返る機会を得て、地域の子育て支援者のリーダーとして成長していった方へのインタビューである。

<インタビュー1>

利用している時は、提供会員の気持ちが全く分からなかった。「子どもを預かってもらうために、こっちは、お金を出しているでしょう、だからそっちも黙ってやってよ」という状態。提供会員と利用会員の交流会の時、アドバイザーが、利用者の気持ちを、何でもみんなに教えてやって、と言ってくれました。わたしは、提供会員に「子どもを預けたときに、コンビニ弁当を食べさせていたとか、お尻にかぶれができてからちゃんとした方が良かったとか、いろいろ言われると、ストレスがたまるので、言わないでほしいです。ただ、預かってもらえたらいいです。」と伝えた。【2006.8.30 筆者のインタビュー】^④

<インタビュー2>

子どもから離れたくて、少しでも離れることができる機会がある、ということで本事業の託児付き講座を受けることにした。家に子どもとこもっているときは、自分だけが悲劇のヒロインだった。外に出て初めてみんないろんな気持ちを持っていることを知った。自分と同じで、言葉に表せない「なんとなくブルーでイライラする」気持ちの人がいてびっくりした。「子どもから離れたい」という個人的な感情だけで託児付き講座を受けたのに、心のイライラが少し取り除けた。落ち着いて考えることができるようになって、周りを見る心のゆとりが出てきたら、周りにお世話になっていたことに気づいて、私も提供会員やってみようかな、と考えるようになった。提供会員をしてみたら、利用者側のわがままも見えてきて、自分の態度をすごく考えなおした。【2006.8.30 筆者のインタビュー】

この点については、抽象的・量的データからは見えてこない方法論の限界であり、データと合わせて、本事例のような摩擦の経験をいかに発達に結びつけるのかについて、実践を構造的に捉えていくことが本研究の今後の課題であるといえる。

3-4. 「支えられた経験から恩返しをしたい」という意識

自由記述をみると、961 サンプル中、586 件の回答があり、回答率 61.0%であった。

そのうち本事業において支えられた経験があるという主旨の回答が 70.82% (415 件)、支えられるにはさらなる工夫が必要という回答(要望)が 28.67% (168 件)、その他 0.51% (3 件)であった。支えられた経験があるという主旨の回答では、「自分が大変なときに助けて頂いた。」「誰かに恩返しをしたい」「我が子にいろいろな人が関わって育ててくれていると実感した。」「提供会員から、身内や親戚の様に気にかけてもらった。」「提供会員のおかげで、家族以外の人と関わる機会ができた。」など、支えられた経験から、このつながりを再生産していきたい思いが綴られていた。一方、さらなる工夫が必要については、「費用の問題」、「障がい児に対する支援の問題」、「保育する方との人間関係」などが挙げられた。586 件の自由記述を読み込んでいくと、本事業を取り巻く人々の温かい関係性が見えてくる。

4. まとめ

本報告では、福祉事業を受ける親、つまり学習しようという自覚があつて事業を利用しているのではない親を、サービスの客体と位置づけるのではなく、成人の学習における主体として捉え、どのような経験によって、どのような変化が見られるのかを明らかにしてきた。特に、Table 11-2 「親の経験」と「親の発達」の相関によって、その一端が明らかになったといえる。福祉事業の利用しやすさが、子育ての外部委託化、親の育児力の衰退・低下を助長するというよりも、保育する側である地域住民と、親の間で、親にとって有効な学習機会を提供できるのかどうかを要点となると考えられる。その際、今回特に有意差がみられた、〈子どもとの関わり方を学ぶ経験〉、〈家事や育児の方法を学ぶ経験〉、〈地域とのつながりを学ぶ経験〉が、一つの柱になってくるであろう。本事業を有効に提供することによって、地域住民と親との関わりが生まれ、対話の機会となり、親にとっての学習機会が創られている可能性があるといえる。さらにこのことが、共に支えあいながら子育てをするという、地域の子育て文化を再生産するきっかけとなることも考えられるのである。

※本章は、平成 21 年度日本社会教育学会紀要論文として掲載が決定している。

文献

- ① 三輪健二「第 1 章成人学習論の展開—国際的動向として—」日本社会教育学会編『日本社会教育学会・創立 50 周年創立記念講座・現代社会教育の理論Ⅲ・成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版、2004 年、28-43 ページ。
- ② 青木一ほか編者「現代教育学辞典」労働旬報社、1988 年、64 ページ。
- ③ 依田新監修「新・教育心理学辞典(普及版)」金子書房、1983 年、77 ページ。

- ④ 森口兼二、「第1部 第5章 社会教育の学習論」日本社会教育学会編『現代社会教育の創造—社会教育研究30年の成果と課題—』東洋館出版、1988年、190ページ。
- ⑤ オールポート（今田恵監訳）「人格心理学」上下巻、誠信書房、1974年参考。
- ⑥ 社会教育基礎理論研究会「叢書生涯学習Ⅶ 成人性の発達」（株）雄松堂出版、1989年、175～176ページ。
- ⑦ 幸順子「愛知県における子育て家庭支援の研究—ファミリー・サポート・センター事業の検討を通して」名古屋女子大学 編『名古屋女子大学紀要人文・社会編』53巻、2007年、65～78ページ。東内瑠里子「子育て・家庭教育支援における親の学習機会の再考：佐賀市・鳥栖市のファミリー・サポート・センターを事例として」佐賀女子短期大学『研究紀要』41巻2007年、69-76ページ等。
- ⑧ 山下亜紀子「育児支援者の動機付けに見る地域型育児支援の展望」国立女性教育会館編『国立女性教育会館研究紀要』8巻、2004年、39-50ページ。
- ⑨ 財団法人女性労働協会「緊急サポートネットワーク事業との連携をめざして」『平成17年度ファミリー・サポート・センター活動状況調査結果報告書』同協会発行、2006年。
- ⑩ 岡崎和美「ファミリー・サポート・センターの現状と今後の展望—要支援事例と専門機関との連携課題に着目して」高知女子大学紀要編集委員会編『高知女子大学紀要』57巻2008年、81～92ページ。
- ⑪ 東内瑠里子「子育て・家庭教育支援における親の学習機会の再考—佐賀市・鳥栖市のファミリー・サポート・センターを事例として—」『佐賀女子短期大学研究紀要』第41集、2007年、69-76ページ。

V 本事業の保育者側から見える親育ちの実態

<要旨>

ここでは、本事業の保育者側から見える親育ちの実態について明らかにしてきた。

保育者が、親との関係において配慮している点は、次の3点である。①子どもの様子をできるだけ細かく親に伝えること。②コミュニケーションを大切にすること。③他人に大事な子どもを預けるから、安心できる雰囲気を作ること。一般的に言われる相談や助言については、「相談されれば、助言するが、積極的なアドバイスは控える」という回答が非常に目立った。そして「積極的に苦言を呈す」というような回答は、1%にも満たなかった。前章において、親の育ちが明らかになったが、その要因は、保育者からの指導というよりも、一緒に子育てをする相手との直接的な関係から生み出されていると分析できる。

さらに注目すべきは、保育者が感じる親の変化も、この3つのキーワードと同じであったことである。もちろん、保育者自身の回答だから当たり前かもしれない。しかし、ここから言えることは、実際に親にかかわっている保育者は、親の肯定的変化(=親の育ち)を、親の否定的変化よりも、確実に実感しているという点である。

1. 本報告の位置づけと課題

従来型支援の隙間にあるニーズに対応し、さらに親の学習を促す本事業は、どのような保育者が担っているのだろうか。また保育者は、どのようなことに配慮して、親に関わっているのだろうか。このことについて明らかにした研究は、管見の限り見あたらない。よってここでは、本事業における保育者像とその保育者が親の育ちについてどのように実感しているのかについて具体的に明らかにすることを課題とする。本事業の保育者は、有償ボランティアとしての位置づけであり、市町村ごとの役割のルールがあり、事務局が最終的な責任を果たしているものの、日常的には謝礼の受け渡しを個人同士に任せるなど、保育者が直接親に関わることが大半である。その意味で、保育者の実態を明らかにすることは、これまでなされなかったにも関わらず、地域の支援者と親との関係の構図を明らかにする大きな意義があると考えられる。

2. 調査の概要

2-1. 調査時期・対象・方法

調査時期は、2008年1月下旬～2月にかけて実施した。調査対象は、厚生労働省雇用均等・児童家庭局「次世代育成対策交付金」(2007年)の交付を受け活動している540箇所の利用者が、母集団である(母集団の数については、詳細なデータがない)。そのうち女性労働協会ホームページ資料によって連絡先が確認できる508ヶ所に対して、調査協力依頼文と質問紙調査を郵送した。依頼に応じて頂いたファミリー・サポート・センターでは、会員名簿から提供会員5名を無作為抽出していただき、調査紙を配布して頂いた。調査依頼に応じて下さったのは(協力できない旨のご連絡をいただかなかった箇所)、508箇所中、490箇所である。つまり、保育者2450人を調査対象とした。有効回収票は、保育者1,142票、回収率46.61%であった。調査票は、政令指定都市とそれ以外の地域で色

分けをし、回収した際、データを区別することができるようにした。(政令指定都市および中核市 255 票、それ以外の地域 887 票)

2-2.調査内容

調査内容は、大きく4つに分かれる。「1. 属性」「2. 親、子ども、その他との関わりにおいて気をつけていること。」「3. 保育をすることで、親に変化はあったか。あれば、それは自分がどのような関わりをしたからだと考えるか。」「4. 本事業に対する感想」である。1以外、すべて自由記述である。

3. 結果と考察

3-1.保育者の属性

保育者の属性については、表1に示している。保育者は、75.5%が「母親」である。保育者の年齢層は、図1の通り、団塊の世代周辺層が最も多く、次いで、預ける側でもある子育て真っ最中の層（預ける側は、30～45歳未満が8割以上）が多い。また居住期間を15年間隔で区切ると、15年未満が、他の層と比べて約2割増しだったが、20年間隔で区切ると、20年以上同じ地域に住んでいる者は、約半数いる。つまり、地域の新住民だけが中心的に取り組んでいる訳ではないようだ。

家族構成、就労の有無、保育者の年齢および利用している親との年齢の差を見てみると、典型的な支援関係のモデルを描くことができる。最も多いモデルが、子育てを一段落した母親世代、そして専業主婦あるいは家事の隙間を縫って仕事をし、自分の子どもと同じ世代、あるいは少し上の世代の女性を支援している姿が考えられる（図2・A）。次に多いモデルは、子育て中の母親が、同世代の地域の母親とともに利用し、保育している、あるいはお互いに預け合っている姿である（図2・B）。

地域項目と有意差（*** $P < .001$ ）があったのは、保育者の経験年数である。図2に表すように、全体として約8割が5年未満の経験者であるが、特に地方において、経験が浅く、都市部においては5年前後を頂点として緩やかな弧を描いている。この制度は、当初人口5万人以上の市町村特別区等で展開されていたためである。しかし、いまは次世代育成特定交付金事業として全国的に展開可能となっている。

フィールド調査の実感として、特に地方では、子育てを終えた世代が本事業で活躍しているイメージがある。しかし、預ける親の数が一桁になる47歳を区切りに、保育者の年齢と地域（都市部と地方）との相関をみたが有意差はなかった。ただ図1に示すとおり、年齢と両方会員（預ける側でもあるか）であるかどうかには当然有意差があり、47歳未満の保育者は、保育するだけでなく、預ける側に立つ方が、47歳以上と比較して非常に多い。

保育の内容（複数回答可）としては、自宅から保育所等への送迎が最も多い。保育事業という名称から、預かるイメージが先行してしまうが、子どもが保育所や学校を終え、習い事やその後の学童保育、夜間保育など受け入れ先に送迎する活動も多いのである。親子の生活に応じて柔軟な支援がなされている。

表1: 自分の家族における役割

選択肢	%
母	75.48
父	1.93
祖母	8.67
祖父	0.35
その他	6.74
無回答	6.83
合計	100

※無回答には「未婚」等がある。

表2: 就業の有無

選択肢	%
有職	38.2
無職	54.2
無回答	7.6
合計	100.0

表3: 有職者の就労形態

選択肢	%
正社員	6.0
契約・臨時職員	16.8
パート・アルバイト	55.9
自営業	11.7
在宅ワーク	4.2
その他	5.5
合計	100.0

表4: 同地域での居住期間

期間	%
0年～15年未満	41.6%
15年～30年未満	24.3%
30年～50年未満	23.7%
50年以上	10.6%

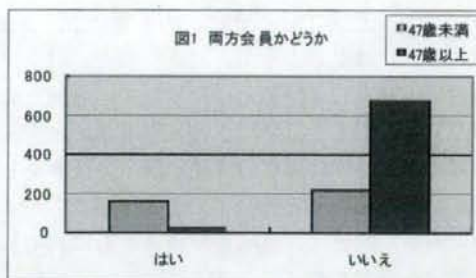
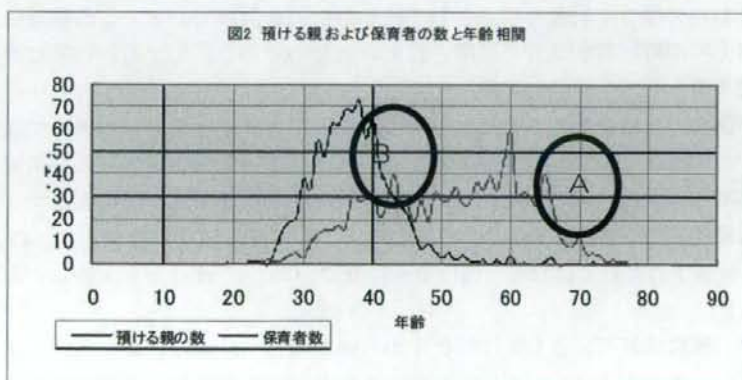


図2: 預ける親および保育者の数と年齢相関



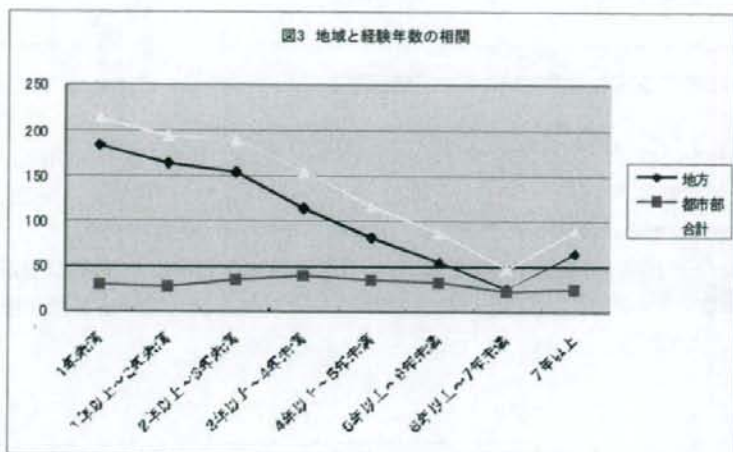


表5 保育の内容（複数回答）

①	自宅から保育所等への送迎。	50.8%
②	保育所・幼稚園の開始前や終了後子どもを預かる。	43.8%
③	学校の放課後や学童保育終了後子どもを預かる。	36.3%
④	学校の夏休みなどに子どもを預かる。	15.0%
⑤	保護者等の病気や急用等の場合に子どもを預かる。	46.4%
⑥	冠婚葬祭や他の子どもの学校行事の際、子どもを預かる。	26.0%
⑦	買い物等外出の際、子どもを預かる。	25.9%
⑧	その他	29.0%

3-2. 保育者が親との関わりで気をつけている要素の抽出

表6は、保育者が、親との関わりで気をつけている要素である。調査票の質問項目は、「提供会員をしていて、親や子どもとの関係等において、気をつけていることをお書き下さい」であり、表6は、「①親との関係」の欄に回答されたものである。

3-2-1 分析方法

この質問項目に対する回答者数 1142 名中、無回答あるいは「なし」は 129 名 (11.30%) である。

つまり無回答あるいは「なし」以外で回答を行っているのは、1013 名 (88.70%) である。この回答を、筆者が解釈し、キーワードを抽出、そのキーワードの出現数を、「SPSS Text Analysis For Survys 3.0 Japanese」にインポートし、カテゴリー化したのが、表7である。

各保育者は、かなり分厚い記述をしており、より確実性を担保するためには、質的調査が必要である。筆者が任意でキーワード化することは、不確実性を伴うが、全国的動向を量的に把握するためにこの手法をとった。

3-2-2) 結果

表7は、キーワードのうち出現数が10以上のものをまとめた表である。もっとも多いのが、「子どもの様子・子ども理解」346回 (18.61%) であり、次に「コミュニケーション」281回 (15.12%)、「安心・信頼・安らぐ雰囲気」277回 (14.90%) である。

相談や助言については、「相談されれば、助言するが、積極的なアドバイスは控える」という回答が非常に目立った。そして「積極的に苦言を呈す」というような回答は、1%にも満たなかった。

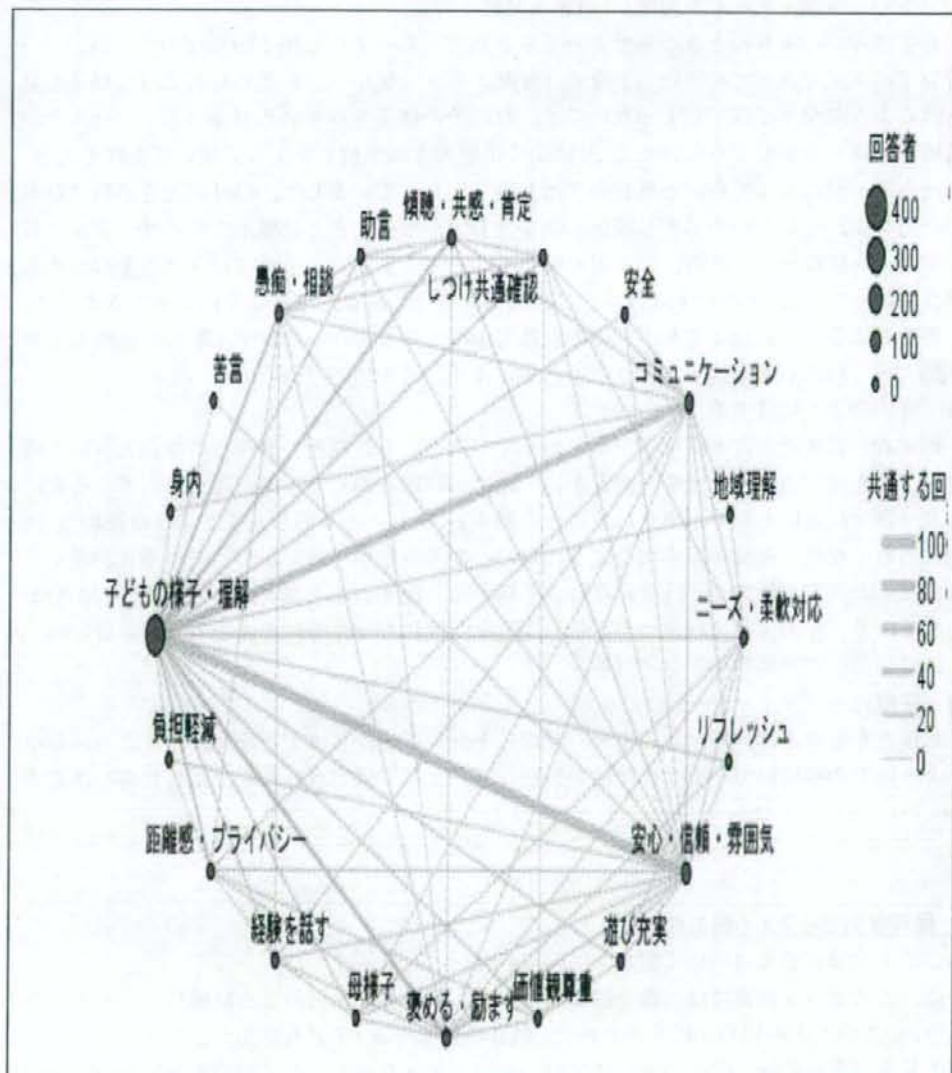
前章において、親の育ちが明らかになったが、その要因は、保育者からの指導というよりも、一緒に子育てをする相手との直接的な関係から生み出されていると分析できる。

さらにキーワード間の関係をわかりやすくするため、図4では、最も多かった「子どもの様子・子ども理解」を中心にサークルレイアウトで表示している。ノード「○」の

表7 キーワード	出現数	%
子どもの様子・子ども理解	346	18.61%
コミュニケーション	281	15.12%
安心・信頼・安らぐ雰囲気	277	14.90%
傾聴・共感・肯定	151	8.12%
愚痴・相談	135	7.26%
距離感・プライバシー	124	6.67%
子育て経験・失敗談を話す	86	4.63%
褒める・励ます	80	4.30%
ニーズ・柔軟対応	67	3.60%
子育て価値観尊重	45	2.42%
育児の負担軽減	42	2.26%
母の様子を気にする	40	2.15%
相談あれば助言	39	2.10%
身内のように接する	36	1.94%
しつけ共通確認	33	1.78%
リフレッシュ	22	1.18%
安全・事故予防	16	0.86%
地域の様子紹介	15	0.81%
遊び充実	12	0.65%
積極的助言、苦言	12	0.65%
合計	1859	100.00%

大きさは、回答者数をあらわしている。線が太いものは、共通する回答を行ったということがわかる。つまり「子どもの様子・子ども理解」と回答した方の多くは、上位のキーワードである「コミュニケーション」「安心・信頼・安らぐ雰囲気」というキーワードも同時に記述している。つまり、回答者の多くが、この3つのキーワードを大切に親と関わっているということがいえる。

図4 キーワード間の関係性(「子どもの様子・子ども理解」を中心にサークルレイアウト)



また、各キーワードの具体的事例は、以下の通りである。

○「子どもの様子・子ども理解」・・・

自分が預けるときに、子供が泣いていないかとか、さびしくないかなど心配だったので、預かるときにも、お父さんが楽しんでた様子を伝えたり、私もお預かりできてうれしかったことや、家の子も楽しんでた、ということ伝えるようにしています。

○「コミュニケーション」「価値観尊重」・・・

活動外で顔を合わす時も子どもさんの様子や近況を聞いたりしてコミュニケーションをとっている。見た目はママギャル風だったが、子どもとしっかりかかわり、考え方もきちんとしていて見た目ではいけないと反省した。

○「安心・信頼・安らぐ雰囲気」「傾聴・共感・肯定」・・・

お父さんが〇ヵ月のときからサポートをさせてもらっている様子からなのですが、・・・子育てが大変で大変での思いしかなく「育児ノイローゼ」・・・を思わせるような様子も見られるようになって来てしまったのです。私はその様子をみているのがつらく、なんとか気持ちを落ち着かせてもらいたく、とにかく母親の今の気持ちをよく聞いてあげること、気持ちも一緒になってあげる事を繰り返し繰り返ししていました。〇月のときが特にひどかったです。そこから少しずつ顔色、顔つきもよくなってきて、親子で外のサークルに参加するようになってきたら、どんどん明るくなってきました。子育てのリズムをつかめるようになってきて、サポートに行くたびに楽しい様子の話を聞けるようになってきました。一年を迎えるようになってサポートの回数も少なくなりよかったです。寂しい気持ちもありますがこれからも応援して行きたいと思います。＜中略あり＞

○「身内のように接する」・・・

転勤者、移住者の方々には、市街を知ってもらうことに役所、病院、市場、食料品の産直店、観光地案内、また食事の話とか、一緒にお料理をつくるとか、遅く帰ってくる夫にも食べさせなさいとか等が生まれることも展望し、楽しめる事柄をもてるように勧める(次第に明るくなり、笑顔が多く出るようになり、涙ぐみながら話だし、夫の帰りが遅く夕方になると不安で仕方なく、そんな時、子供が泣き出すとますますどうして良いのか分からなくなり、家の天井に押しつぶされるような心境になった等) 其の後の支援に買い物、子供の通院、観光地等のドライブ等。

○「距離感・プライバシー」・・・

お母さんとは月に何回かあいます。サポートセンターからはその家庭に余りたちいないようにとの事聞いていますので何か特別な事、又は子供がうれしそうにした事を連絡するようにしています。

4. 保育者側から見える親の変化

ここまで保育者像について明らかにしてきた。

では、このような保育者は、親と関わりながら、親の変化をどのように感じているのであろうか。このことを明らかにするために、調査項目1-2「子どもを預かるようになって、親の変化(①良い面、②悪い面)に気付いたことがありましたか。親の変化について、実際の事例をお書きください。」という質問項目を設定した。

4-1. 親の肯定的変化

4-1-1) 分析方法

回答者数は612名(53.59%)、無回答あるいは欠損値は530名(46.40%)である。欠損とは、質問内容が回答者にとってわかりずらかったため、親の変化を、保育者自分自身の親としての変化と捉え、保育者自身の変化を記述している項目のことであり、これは欠損値と判断した。つまり純粋に親の変化を記述した項目のみ採用した。各自由記述を筆者が解釈しキーワードを複数取り出した。各保育者は、かなり分厚い記述をしており、筆者が任意でキーワード化することは、不確実性を伴うが、全国的動向を把握するためにこの手法をとった。筆者が抽出したキーワードを、「SPSS Text Analysis For Surveys 3.0 Japanese」にインポートし、出現数をカウントし、カテゴリー化したのが表8である。

4-1-2) 結果

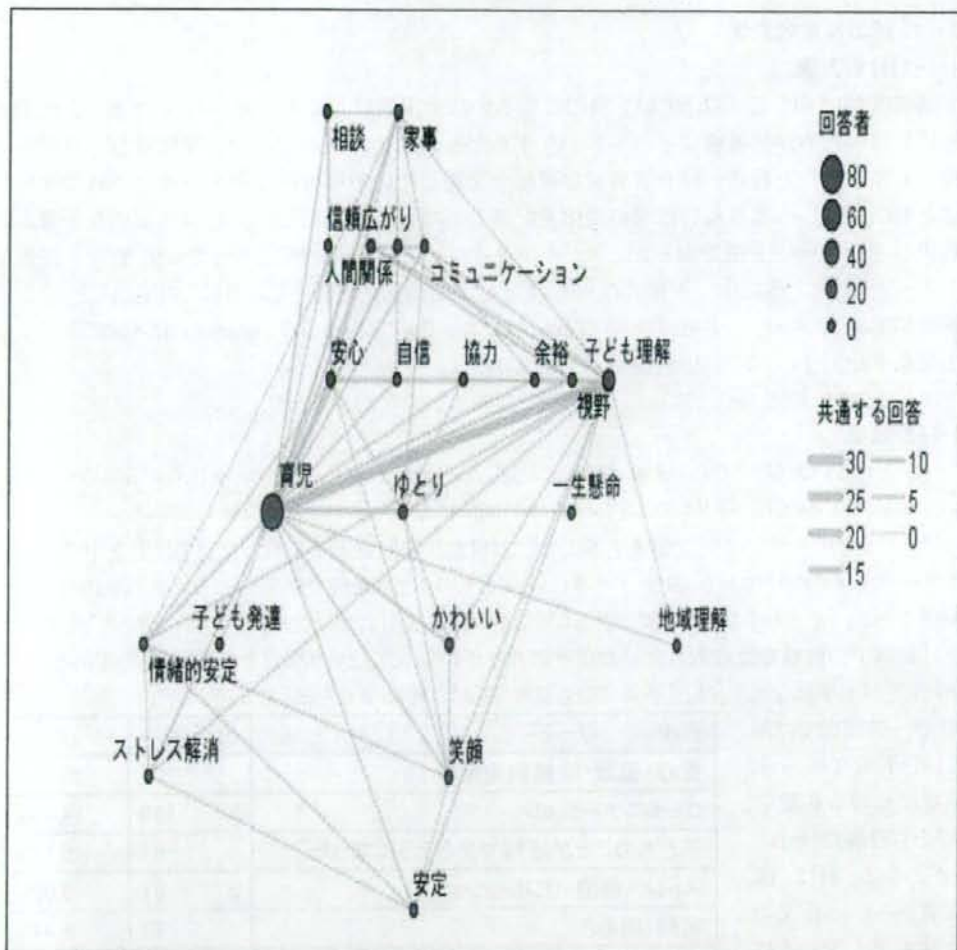
もっとも多いのが、「安心・信頼・情緒的安定」205回(22.85%)であり、次に「コミュニケーション」130回(14.49%)、「子どものことが理解できるようになった」91回(10.14%)、である。

さらにわかりやすいように図5を作成した。これは、「育児が上手になった」(74回)を中心にしたサークルレイアウトである。注目すべきは、「子どものことが理解できるようになった」(91回)との関係である。「子どものことが理解できるようになった」とは、「わが子が、片付けができることを知った」「わが子の性格を受け入れた」「わが子の良さがわかった」という項目をまとめたものである。また「育児が上手になった」は、「子育ての方法を学んだ」等の項目をまとめた。

30 ケース程度ではあるが、子育ての方法を身につける基盤に、「子ども理解」があることがわかる。親は、保育者から単に育児の方法を学んでいるのではなく、保育者という第三者からわが子の様子を教えられること、あるいはわが子を客観的に見ることによって、自分では見えなかったわが子の姿を知り、その子へのかかわり方を学ぶことにより、育児の方法を身につけていると考えることができる。

表8 キーワード	出現数	%
安心・信頼・情緒的安定	205	22.85%
コミュニケーション	130	14.49%
子どものことが理解できるようになった	91	10.14%
ストレス解消・リフレッシュ	81	9.03%
笑顔・明るさ	76	8.47%
育児が上手になった	74	8.25%
地域協力・提供会員になった	69	7.69%
相談できるようになった	64	7.13%
感謝するようになった	31	3.46%
こどもがかわいく見えるようになった	23	2.56%
やる気がでた	15	1.67%
視野が広がった	10	1.11%
家事上手になった	9	1.00%
自信がついた	9	1.00%
子どもの発達が促された	9	1.00%
病気がなおった	1	0.11%
合計	897	100.00%

図5 キーワード間の関係性(「育児」を中心にしたサークルレイアウト)



また各キーワードの具体的な事例は次の通りである。

- 「安心」・・・預かった内容を伝えると自分が悩んでいる程、人見知りやミルクを飲まない(少食)ではないと安心し、客観的に自分の子どもを見れる様になった。
- 「子ども理解」・・・女の子ですが、ある時のお預かりした日、『お母さんがお迎えまでおかたづけするネ！』普通の会話でしようが、自ら、私に言って、本当にきれいにおかたづけしました。たぶん幼稚園の延長でお友達と一緒にしているものと思います。この事をお母さんに伝えたら、本当に驚いて聞いているので「家では全くしないのよ！」と…。その後、お母さんも、気が付いたのか、我が子も“よくやるよ”と笑っていました。成長でしょうねと。
- 「コミュニケーション」・・・自分の子どもの頃の辛い話を語ってくれる様になりました。<中略>
- 「育児が上手になった」・・・子供が不安定で親はかわいいらしいが物を与えたりするのみで1年生でも1人で風呂に入れたり、食事も1人、親は一緒にしない。生活を一緒に食事、風呂、

寝る時も一緒にいてあげないと大きくなって大変だと話すと、変化していった。

○「笑顔」・・・子供さんの母親が精神的に疲れ育児放棄寸前で子供さんも笑わなくなったのでサポートさせてもらいお母さんも元気に生まれ子供さんの笑顔もみられるようになりました。

4-2. 親の否定的変化

4-2-1) 分析方法

回答者数は247名(21.63%)、無回答あるいは「なし」、欠損値は895名(78.37%)である。欠損とは、質問内容が回答者にとってわかりずらかったため、親の変化を、保育者自分自身の親としての変化と捉え、保育者自身の変化を記述している項目のことであり、これは欠損値と判断した。つまり純粹に親の変化を記述した項目のみを採用した。各自由記述回答を筆者が解釈し、キーワードを複数取り出した。各保育者は、かなり分厚い記述をしており、筆者が任意でキーワード化することは、不確実性を伴うが、全国的動向を把握するためにこの手法をとった。筆者の抽出したキーワードを、「SPSS Text Anarysis For Survys 3.0 Japanese」にインポートし、出現数を計算し、カテゴリー化したのが、表9である。

4-2-2) 結果

まず、回答者数だけを見ても、肯定的変化と比較して、否定的変化は、非常に少ないことがわかる。もっとも多い出現数は、「サービス・要求・依存」90回(30.00%)であり、次に「時間ルーズ」86名(28.67%)、「自分優先」58名(19.33%)である。またこれらの否定的変化は、事前のマッチングでの相互理解において、あるいは保育者の研修会および双方の交流会において防ぐことが可能なものがあるのではないだろうか。

各キーワードの具体的事例は次の通りである。

○「サービス・要求・依存」・・・お金に不自由なしの家で、けっこう無理なたのみもしたりしてきた。時間外ついでに、クーリーニングお願いとか、ビデオ返してとか、自分でできるものも、してちょうだい！！でもしっかり金額の方は出してくれていました。

○「時間ルーズ」・・・依頼の日程を決めておきながら、後で頼んでいないとうそをつかれた事がありました。これに関しては、自分自身まだ未熟で信用しきっていたものですから口約束はしてはいけなと思いました。

○「自分優先」・・・約束の時間が過ぎても連絡もなく平気で遅くなってしまう親(初めはきちんとしていたが慣れてくると・・・)自分磨きに力が入りすぎて毎回毎回自分のためだけに子供を預ける親(預ける回数のおおはばな増加)

○「支払」・・・はじめのうちは同じお金を払っていても感謝の言葉が聞かれたが、回数を重ねるうちだんだん当然といった感じになってきて時には料金が高いと、支払いも拒否されるようになってきた。

表9 キーワード	出現数	%
サービス・要求・依存	90	30.00%
時間ルーズ	86	28.67%
自分優先	58	19.33%
支払滞る	26	8.67%
関わり嫌がる	9	3.00%
子どもとの相性	9	3.00%
礼儀・しつけ	7	2.33%
病児	6	2.00%
保育者のプライバシー	5	1.67%
気遣いなし	4	1.33%
合計	300	100.00%

5. 従来型支援を補完する保育者から見える親の変化

ここでは、本事業の保育者側から見える親育ちの実態について明らかにしてきた。

まず、保育者像について明らかになった。家族構成、就労の有無、保育者の年齢および利用している親との年齢の差を見てみると、従来型線を補完している典型的な支援関係のモデルを描くことができる。最も多いモデルが、子育てを一段落した母親世代、そして専業主婦あるいは家事の隙間を縫って仕事をし、自分の子どもと同じ世代、あるいは少し上の世代の女性を支援している姿が考えられる。次に多いモデルは、子育て中の女性が、同世代の地域の女性とともに利用し、保育している、あるいはお互いに預け合っている姿である。

この保育者が、親との関係において配慮している点は、次の3点である。①子どもの様子をできるだけ細かく親に伝えること。②コミュニケーションを大切にすること。③他人に大事な子どもを預けるから、安心できる雰囲気を作ること。一般的に言われる相談や助言については、「相談されれば、助言するが、積極的なアドバイスは控える」という回答が非常に目立った。そして「積極的に苦言を呈す」というような回答は、1%にも満たなかった。前章において、親の育ちが明らかになったが、その要因は、保育者からの指導というよりも、一緒に子育てをする相手との直接的な関係から生み出されていると分析できる。

さらに注目すべきは、保育者が感じる親の変化も、この3つのキーワードと同じであったことである。もちろん、保育者自身の回答だから当たり前かもしれない。しかし、ここから言えることは、実際に親にかかわっている保育者は、親の肯定的変化(=親の育ち)を、親の否定的変化よりも、確実に実感しているという点である。

VI 単純集計<親への調査票>

1. 事業利用者層について

<要旨>

ここでは、ファミリー・サポート・センター事業の利用者に対して、属性に関する調査項目を設定し、選択肢による回答と、自由記述による回答を設定した。回答者の属性について、以下のことが明らかになった。

①利用者の約8割は、30才以上～45才未満である。②13才未満の子どもを持つ利用者が約9割である。③利用者は、就業している親が多いが、就業していない親の利用者も約3割ある。④就業している利用者は、非正規雇用・パート・アルバイトが、約3割。また、就労時間は、9時間以上が約3割。不安定で、長時間労働が約3割程度あるということである。⑤利用会員のうち、約4割強が、今後提供会員になりたいと回答している。その理由として190人が、「助けてもらった、支えられた経験から恩返しをしたい」と回答している。さらに、103人が「助け合いたい、人の役に立ちたい、地域に貢献したい」と回答している。⑥一方、利用会員のうち、約5割が、今後提供会員にならない、と回答している。理由としては288人が、「時間がない、子育てで手一杯、まだ考えられない、仕事がある」と回答している。⑦援助内容では、その他の項目で、ファミリー・サポート・センター事業が、休日保育や待機児童対策、病児・病後児保育などの保育所の代替的役割を果たしていることがわかる。

1. 問題設定

ここでは、全国ファミリー・サポート・センター事業の利用者961名から回答をいただいた。ファミリー・サポート・センター事業を利用している親は、どのような属性にあるのだろうか。どのような頻度でファミリー・サポート・センター事業を利用し、どのような援助内容を受けているのだろうか。このことを明らかにするために属性に関する調査項目を設定し、選択肢による回答と、自由記述による回答を設定した。

2. 選択肢の回答

○質問項目1

質問項目1は、利用者の子どもにとっての属性である。表1-1に示したとおり、利用者の93.86%(902人)は、母親である。祖父については、0%であった。

質問項目番号Ⅲ-1

お子様にとってのあなたの属性をお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
母	902	93.86%
父	33	3.43%
祖母	8	0.83%
その他	2	0.21%
無回答	16	1.66%
合計	961	100.00%

表 1-1 利用者の子どもにとっての属性

○質問項目2

質問項目2は、利用者の年齢である。表1-2に示した通り、35才以上～40才未満が、34.10%を占める。30才以上～35才未満は、24.53%であり、35才以上～40才未満と合わせると、30代の利用者は、58.63%であり、利用者の半数以上となる。続いて多いのは、40才以上～45才未満の20.58%である。利用者層の

79.23%、つまり約8割は、30才以上～45才未満であり、この年齢層に利用者が集中していることがわかる。

平成18年度版少子化社会白書によると、晩婚化、晩産化の影響によって、子どもが出生したときの母の年齢は、2005年では、第1子が29.1才、第2子が31.0才である。¹また、1974（昭和49）年生まれの女性、約半数（51.9%）が、30才時点で子どもを産んでいないことを考えると、利用者の年齢層は、今後、益々高くなるであろう。

質問項目番号Ⅲ-2

あなたの年齢についてお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
20才未満	16	1.66%
20才以上～30才未満	65	6.76%
30才以上～35才未満	236	24.56%
35才以上～40才未満	328	34.13%
40才以上～45才未満	198	20.60%
45才以上～50才未満	58	6.04%
50才以上～55才未満	16	1.66%
55才以上～	15	1.56%
無回答	29	3.02%
合計	961	100.00%

質問項目番号Ⅲ-3

お子様の人数をお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
1人	339	35.28%
2人	430	44.75%
3人	150	15.61%
4人	22	2.29%
5人	2	0.21%
無回答	18	1.87%
合計	961	100.00%

表 1-2 利用者の年齢

○質問項目 3

質問項目 3は、利用者の子どもの人数である。

回答は、1人が35.28%（339人）、2人が44.75%（430人）で、合計すると80.03%である。約8割の利用者の子どもの数が、1～2人であることがわかる。また、利用者の平均出生児数1.85である。

国立社会保障・人口問題研究所調査の夫婦の完結出生児数（結婚持続期間15～19年）は、2005年段階で2.09であることから考えると²、若干であるが、子どもを1人持つ親の利用が高いといえる。

質問項目番号Ⅲ-3

お子様の人数をお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
1人	339	35.28%
2人	430	44.75%
3人	150	15.61%
4人	22	2.29%
5人	2	0.21%
無回答	18	1.87%
合計	961	100.00%

表 1-3 子どもの人数

○質問項目 4

質問項目 4は、利用者の子どもの年齢である。表 1-4 から表 1-7 に示しているように、第1子は、3才以上～7才未満が36.11%、7才以上～13才未満が33.82%と、3才未満が18.73%であり、13才未満の子どもを持つ親が約9割（88.66%）であることがわかる。第2子、第3子にいたっては、年齢層がさらに下がる。つまり、子どもが小学生以下の親が、多く利用していることがわかる。また、乳幼児を持つ親だけではなく、小学生の子どもを持つ親の利用もあることがわかる。

選択肢	度数	パーセント
3才未満	180	18.73%
3才以上～7才未満	347	36.11%
7才以上～13才未満	325	33.82%
13才以上～19才未満	58	6.04%
19才以上	27	2.81%
無回答	24	2.50%
合計	961	100.00%

表 1-4 利用者の第1子の年齢

質問項目番号Ⅲ-4

第2子のお子様の年齢をお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
3才未満	208	21.64%
3才以上～7才未満	234	24.35%
7才以上～13才未満	110	11.45%
13才以上～19才未満	21	2.19%
19才以上	20	2.08%
無回答	368	38.29%
合計	961	100.00%

表 1-5 利用者の第2子の年齢

質問項目番号Ⅲ-4

第3子のお子様の年齢をお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
3才未満	76	7.91%
3才以上～7才未満	56	5.83%
7才以上～13才未満	22	2.29%
13才以上～19才未満	5	0.52%
19才以上	8	0.83%
無回答	794	82.62%
合計	961	100.00%

表 1-6 利用者の第3子の年齢

質問項目番号Ⅲ-4

第4子のお子様の年齢をお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
3才未満	9	0.94%
3才以上～7才未満	7	0.73%
7才以上～13才未満	4	0.42%
13才以上～19才未満	0	0.00%
19才以上	0	0.00%
無回答	941	97.92%
合計	961	100.00%

表 1-7 利用者の第4子の年齢

○質問項目5

質問項目5は、利用者の家族構成員数である。

表 1-8 に示しているように、3人が32.12% (309人)、4人が37.94% (365人)、5人が16.84% (162人)である。親と子どもだけという2人も、3.74% (36人)存在する。家族構成員が少ないと言

うことは、自分が子どもを育てることができない時間帯を、家族にお願いすることができないということであり、家族にお願いできないから、ファミリー・サポート・センター事業を利用するという家庭が多いと考えられる。

質問項目番号Ⅲ-5

家族の人数についてお答え下さい。

選択肢	度数	パーセント
2人	36	3.75%
3人	309	32.15%
4人	365	37.98%
5人	162	16.86%
6人	49	5.10%
7人	16	1.66%
8人	3	0.31%
10人	1	0.10%
無回答	20	2.08%
合計	961	100.00%

表 1-8 利用者の家族構成員の人数

○質問項目6

質問項目6は、利用者の就業の有無についてである。

表 1-9 に示しているように、就業していると回答したのは、66.60% (640人)、就業していないと回答したのは、30.70% (295人)であり、就業している割合が高い。ただ、就業していない親の利用率も3割を超えていることがわかる。後述するが、子どもの保育が必要な場面は、働いている、働いていないだけの問題ではなく、生活の中に多様であり、ファミリー・サポート・センター事業は、この多様な保育ニーズに対応できているからこそ、就業していない親も多く利用することができるのではないかと。